

門ル 3
3765
3

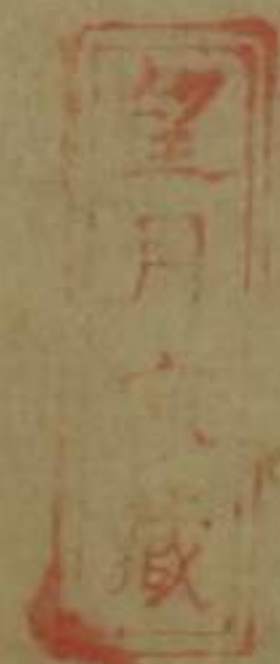


木曾路名所圖會卷之二

目錄

寢物語里
 妙應寺
 常盤津茶壘
 不破關
 關ヶ原
 園東兵市身趾
 班女旧蹟
 美濃中山
 南宮金山表神社
 勅使殿
 以上端垣の
 龍飛御宮
 藤合祠
 和射見野
 青坂祠
 黄鳥殿
 戸佐々宮
 美濃中道
 天武天皇行宮
 野上里
 不破頓宮
 本陣社
 兼摩堂
 内小あり
 三重塔
 明千宮祠
 車返坂
 親善聖人旧跡
 大台吉隆塚
 月見祠
 竹中重源城址
 桃賦
 垂井
 垂井頓宮
 十禅師社
 南大社
 本地堂
 釋迦堂
 稻荷祠
 今須
 黒血川
 開藤川
 不破光治若
 首塚
 伊富貴神社
 垂井清水
 民安庵寺
 高山右衛門
 元三大師堂
 藥師堂
 山王祠

33
577





車返り
 菅之月
 振政良基公
 やくまのあせ
 不破の冥土

木曾路名所圖會卷之二目錄

琵琶嶺
 竈山
 西行硯池
 根津甚平墓
 中川神社

○ 大井
 伊勢參宮別道
 母衣岩
 坂中
 惠奈神社

烏帽子岩
 七幸松
 花か山
 八幡宮
 與坂番所

○ 大倣
 西行墳
 大井橋
 中津川
 落合靈社



蘇島

天下
 此
 牛
 寝



物
 寝
 里

車

木曾路名所圖會卷之二

寝物語里

この道に英徳の國境なり長久寺村ありむら

たあらしむら

は里小義徳の愛妻靜の國除養承遊りやせ

長川記

をけりしむらとあり道に英徳の山脈

左右小見くゆくそ後なり

和射見野

今此地名瓜鴨澤とあり

天武天皇大友皇子に襲はれは爲市王子に陣營不行幸

一多一幸日本紀見く

万葉

真木立不破山越而狗劍和射見乃

原乃行宮尔安母理座而天下

吾妹子之笠借手乃和射見野尔吾

者入跡妹尔告乞

夫木

真木立は美のりてはけさこの瓜うち果もや色にるん

同

あけられの志たれうと身のつとめと程をゆふ夏草はは也

兼良

公實

車返坂

長久寺の東二所洋小ありかた坂なりこれ今須へ

付不破の郡の月夜後世に傳説の言伝世に論とある勿

あけくると作して見たりとて屋敷を藁うりては藁の積り

藁をよくとは坂ありて藁の積りては藁の積りては藁の積り

藁をよくとて藁の積りては藁の積りては藁の積りては藁の積り

のりては藁の積りては藁の積りては藁の積りては藁の積り

美濃今須

関ヶ原十で一里むくく居益中書一之は宿東の瑞小
居益塔下中く坂あり清と和宗之又訓と手向せり
幸なり嶺あり多く神社ありは手向して通る湯く

美濃川記

一丈園小ありは系まをたぐくき所とり一庭

妙應寺

妙應寺 今須の宿中妙應寺の東あり青坂と号し曹洞宗西
尚平願とむり今須の城主長八郎左衛門重宗の母菩
提のお小建立する今伏見宮御願所とす

青坂祠

青坂祠 宿の東妙應寺の御あり妙應寺の御守あり系神孫余
権五郎景政重宗の祖父秀宗と義久の礼後小

親鸞聖人齋跡

親鸞聖人齋跡 今須の東飛来村聖蓮寺とす

柱本

柱本 聖人存けり極の御あり以前と旧跡もておく遊世

黒血川

黒血川 今須の東山中村の川の方の流をり
黒血川 川幅いと狭し
まよるく見れは名の重き黒血川とすは流あり流の系く非
百士紀行 竟老

美濃川記

白波と岸北岩根ふりれとも黒血の橋の名をせり

太平記

はは対刺と移さる白と大將軍及高城後守降泰月橋慶守降を細
川刑部を陣頼春依く本村友成頼依く本佐波利友入道乃登子貞辺に
守秀徳以外諸國の大名五十三人都合其勢を万餘騎二月四日初とす
月六日の早且本辺にとも流の場なる是地川も流にたり奥勢も橋井亦坂
母若ぬや陣をれをくくお侍屋しやて赤小園の辰川を居て後
ち黒血川をあて其間小陣法を取たりける作いあり今にありて
勇士猛將の陣法取く敵と侍川を後と山より流の水派さす事して
こをある今大河と流あて陣と取く事と赤一の兵法あり
むく漢の高祖と楚の項羽を天下に率ふ事八ヶ年を同戦ふ更止り
けりある耐高祖軍小まけり迹る幸三十里討破されたるをとおす小
三子孫孫も足ざりて項羽に十餘万騎攻をりてこれを退ひたる其日
既不善ぬ夜明けは漢の陣へ押し合く高祖を一時小亡とん更りて

常盤墓



此ありとせ勇乃れ小高祖の臣小韓信とひ兵城大將小ありて陣と
 取らせり小韓信口とせ宵小大河をあて橋成横落し舟と打破せ
 持てうけるこ統と連も免るまれば所を知り士率一引も引かみか
 討死せよせ小さんおの謀なり夜明けは項羽の臣十萬騎もくわよせ
 敵成小勢なりせ悔く我を即討小変せんとい其勢察然とて左右と顧
 けしるる瓜韓信が兵二千餘騎一足も引も死とあせりて我ひる種小項
 羽忽ちふらり履く討て去せ万人逆る瓜逆更に十餘里より河とさひ
 法を隔てこちとて敵ともかち支得しと橋成引とせ長たりける
 漢の兵勝小素と今青面をて項羽の陣へ客人とけりよ韓信兵尤を
 あつれとちなる我思ふる有汝等みか持とこ所の去根と棄て其
 囊小ぬとへと抱べいとせ下知しけ兵兵をなぬぬ事うかとさひかく
 大將の命に隨て士率みか持所の根糸と持て其袋小ぬとへと項羽
 陣へせ押よせりる我よ入と項羽の陣の極をみる小は方留成とさひ

伏戎陽々馬の足も乏に後登れ操りし新め如し陣取らわたりは時韓信
 持せらる所の胸囊は低く扱入れしし将を渡さぬして其上攻めりしは
 泥さるる平地の如し項羽の兵二十万騎餘日の軍もははれし是れ
 敵寄るに道近しを待りして羊紐を以て寝る所は高祖の兵七
 万騎圍を以てして押さるる一戦も及び項羽の兵十萬騎
 みか河水の如きく討たふりとは名分は韓信が囊は背水の陣と
 之申あり今昨春昨冬頼春が鼓吹之勢かりしを聞くはこと必
 背ふ如くは國の藤川小陣を取らるる専士率の公成やりの如くして
 韓信が討伐は後その如く去程小國司が家郷の勢十萬騎金井赤
 坂青野が原も充満して東西六里南の三里小陣を張り
 常盤御茶墓 今頃の東山中村の如く其家の傍にあり石塔三基あり其從者の塚あり人欠一歳小常盤御茶墓より
 義朝の如く海小舟より林の風
 黄鳥 川上も黄鳥の如く其の方にかかれそれより其にえん言の聲もあがる
 家集

梅香の下り水乃使とてさされきく其言をん言
 家集

大谷刑部少輔若隆塚 山中村左の方乃山中あり其時孔は藤堂家これと建る
 家集

開藤川 松尾村西あり水係存吹山の麓より流るる國街道藤川の名乃東流なり松尾村の西石壁の園北下と流れ多良りて藤川に合さる
 家集

古今 英徳國國の板川とてさすはては後之人に藤川代て小
 大秋所

風雅 神代より通ある園は其之に傳らるるもはれぬ其の板川
 光明筆
入道

後古今 其代も法久もはれ月とるは影をこしむ園乃板川
 園左大臣

後北達 それ荒るる園の藤川其之を流らるるもはれぬ小下むせひつ
 定家

日 け入るる代々のさうれを思ふゆきも我身小頼む其の板河
 藤原基業
 大後三后

新編撰 いふ小百人園は板河其を流らるるは下り流るるの如き
 藤原實家
 右大臣

後千 りあのの如くはてははれぬいふふりふの如の板河
 藤原實家
 右大臣

千歳 是れより其の如きくはてははれぬいふふりふの如の板河
 藤原實家
 右大臣

種むとせんの藤河まきてもあつてはとあふすてく
一条因又信

ほくねの浮むういりおれ世の中は之のてりてん界北ち河
後人志ん

救ふぬせれの藤河まきてもあつてはとあふすてく
以下五筆

ふたりの瀬瀬もさうは保つてはの社成おしはふく
好古

雪かきぬを浮吹の山風ふ駒うらふむ圃のぬら川
秀社

さてもたてのちかきとよさめはしのか瀬瀬の雲の藤河
二条因白
良基

吹きてく風を浮吹の山風さるさるさるさるさるさる
康元

春の嵐はともは吹の山風さるさるさるさるさるさる
能頼

はくく程も雲井の代を程く度をもつてさるさるさる
内之良
実隆

あまぬれたのちもあまぬれたまはまはまはまはまは
中院通村

十八日ふの園小園の藤河まきてもあつてはとあふすてく
門併

我らとさるさるさるさるさるさるさるさるさる
門併

藤河の橋まき折の折まきとさるさるさるさる
門併

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
一条兼よ公

不破開古蹟 ふたのせんのこす 松尾村の内西の方藤河東の岸上は意の字城今大木戸とり
日

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
大中島親守

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
振政
大政大信

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
信安

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
保積康

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
藤河まき

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
漢人志ん

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
河朝長

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
西家

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
仲二

あつてはとあふすてくはとあふすてくはとあふすてく
光隆

不破川百首

丈本

不破乃や万紅糸らりて梢より嵐風こそぬ国守りも
東路の不破の冥途乃 鈴虫成むやや小ゆきやあけひるるな
ぬる里のふの中山目もれを冥途より一と林をせきゆく

隆信

仲実

光俊

不破の園

不破の園をまねびさしとてわたりきんうらむとてなり

元行

元行月夜はぬれ丸冥途をこの程乃時多も月をうつすを後見

可辨

柏原

柏原とていふと海とまてく英勝園毎ふみとてうらむる川きりあつてふ

とて

とてつと嵐松を本むとてふとてはたてとてわたり日けきん見しぬれ下道

あそ

あそれふむゆきとて越えとてあそは不破乃冥途より茅屋の板むきとて

冷ふ

冷ふ乃わきとてゆるりもを波系橋板政ぬをあせゆめとのらひとて秋の風と

よる

よる乃歩の人ふ奇とて丸物とてまてけいふとて風情とてちる茶とてなればゆき

さ

さてその茶板のこもぬもあつてふゆきとてこもればゆきとてゆき

山中

山中とていふとてゆきとて

郭をこのふ月のの中にかゆつとてまをまは志のふとて

兼良公

関藤川
不破古用

不破の冥途
同作

月影

如り

旅人や

向う合

不破の月

本園



不破の關原を足傳るに河をせりてむく一歩得えく物喜れ之中津門
振政乃河をせりて後とたけ秋の風を海のひし一幸なとれり死あるを
られて

あまの川不破の関原の板庇をうらむをふらむる事 全

戸佐の宮

戸佐の東家上の有性遷の傳ふあり

祭神 天武帝の靈を鎮守の 國比男明神

むく清見天皇を東宮のうらむを禱して吉聖ふふ入るひいひも

れゆく一歩くく大友の王子に獲てさすよとれむそふふ成のぐれ

ゆく伊賀守勢北國をゆく美濃の野上より行宮とさすれ一幸を

日中紀方とふさす一ゆきせし幸遠上あたるれを宮の音高藤方と

たふふさる人は有るくかえり今もまうわわら乃物ゆへも

かへ道ふさるりてと見え

河をせりて野上の事候さすのゆもつんふつあり

兼良公

月見祠

小八月十月月月の儀あり春の神を奉る美濃の中山の儀

不破河内守光治若

不破河内守光治若松尾村の南にふありは光治と稱す松尾の別あり

關ヶ原

關ヶ原美濃關ヶ原美濃關ヶ原美濃關ヶ原美濃關ヶ原美濃關ヶ原美濃

美濃中道

美濃中道美濃中道美濃中道美濃中道美濃中道美濃中道美濃中道

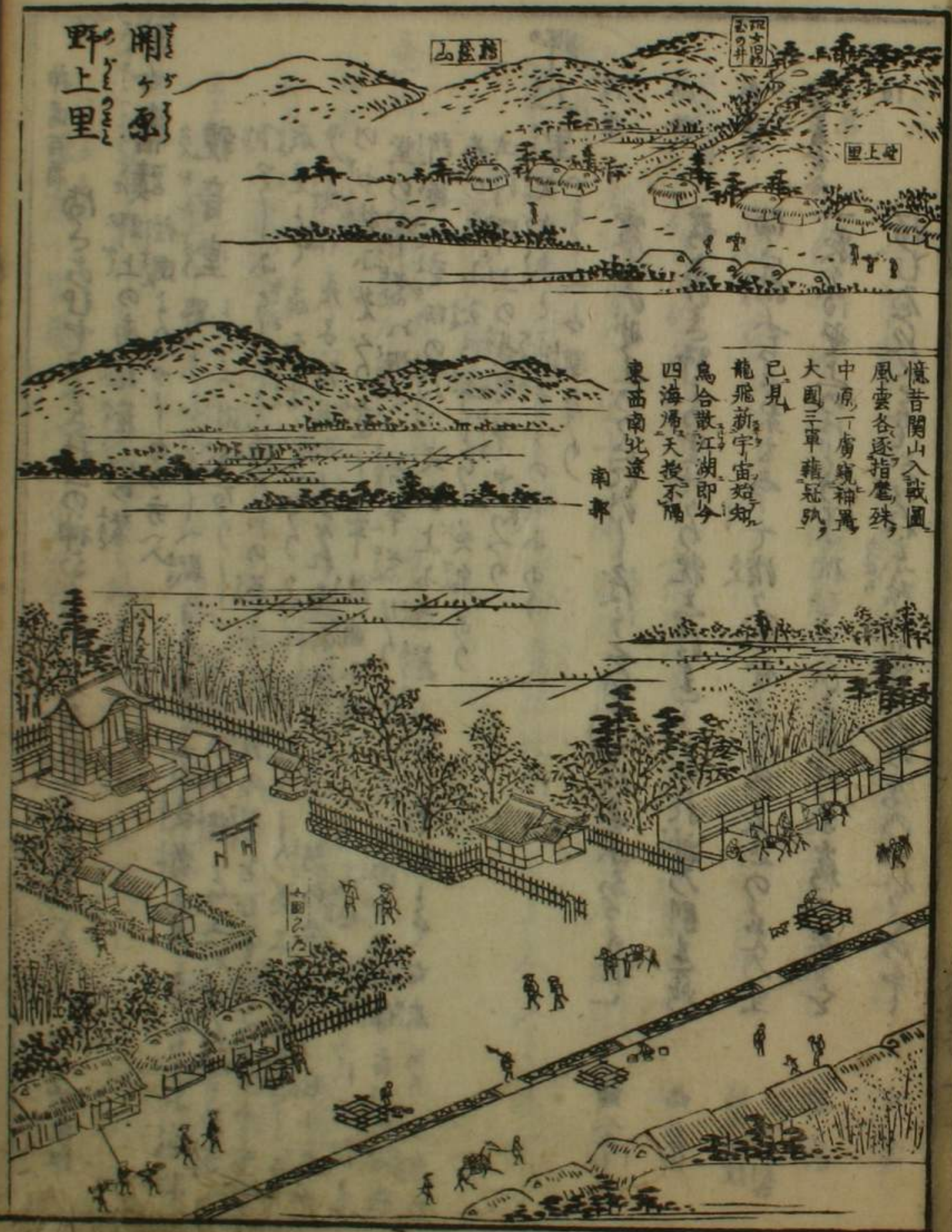
竹中半兵衛尉重治城跡

竹中半兵衛尉重治城跡竹中半兵衛尉重治城跡竹中半兵衛尉重治城跡

首塚

首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚首塚

あまの川不破の関原の中より我身小杖乃るるやとありた 好忠



憶昔關山入戰國
 風雲各逐指麾殊
 中原一虜竄神異
 大國三軍難冠臥
 已見
 龍飛新宇宙始知
 鳥合散江湖即今
 四海揚天授不隔
 東南西北道
 南都

毛ゆぐる火を足したる葉は初るかな 蘇島
 爾原與市屋敷趾 高野の山にありて 粟田にありて 牛久保にありて 小川にありて
 水と跡上り人なり其子榎は犬房丸とよけ子孫

天武天皇行宮 野上村の西に遺る方 山間の平地をり又慶長五
 年九月十五日 神報陳たり

桃賦 其地の名なり天武天皇元年
 六月より小川より一里あり

天皇於茲行宮興野上而居焉此夜雷電
 雨甚則天皇祈之曰天神地祇扶朕者雷
 雨息矣言訖即雷雨止之戊子天皇往於
 和豐檢校軍事而還己丑天皇往和豐命
 高市皇子號令軍衆天皇亦還于野上而
 居之

伊富岐神社 野上の山伊吹村にあり
 延喜式不詳郡三座の内
 祭神 鸕鷀草薙不合尊 鳥居類伊富貴大明神
 野上伊吹村の生去神也

神通百首

班女奮蹟

野上の南郷麓山の麓

ゆゑおむせりては山の神あはれを契りてさかむを

ト松兼邦

親音堂

野上をゆりて一馬あり野上の長者ありてこゝ小菟子
遊女ありて古田の少將とて一人ありて其の
少見とて廟を築き小菟子を祀りて其の契とてむを
取見とて廟を築き小菟子を祀りて其の契とてむを
少見とて廟を築き小菟子を祀りて其の契とてむを
の少將小菟子を祀りて其の契とてむを
堂の少將小菟子を祀りて其の契とてむを
所持一室の尺八又山上小菟子を祀りて其の契とてむを
ある方小菟子を祀りて其の契とてむを
野上の長者ありて其の契とてむを
野上の長者ありて其の契とてむを
野上の長者ありて其の契とてむを

野上里

風推

霞の野上のうらけりてさかむを

新捨

霧志は野上の里にわねとて

村優古

浦と橋ありてさかむを

六百五合

一敷の野上の里にわねとて

日

恒むる人を見ふれば

一字抄

家集

夫本

新後明題

垂井

いそぎふ井の里にわねとて
うちをりて野上の里にわねとて
不破乃山新越を祀りて其の契とてむを
おきてり名新越を祀りて其の契とてむを
赤坂ありて一里十二町野上中東西六七町
かん其地教を祀りて其の契とてむを
南宮の大鳥居あり

南宮の大鳥居あり

垂井清水

新井の清水あり

詞花

むく見たりておれおれ

夫本

我神乃志のふいふ

最上紀り

昔見りておれおれ

美川記

むく見たりておれおれ

珠簾十里揚列路とて



あさたふくぬかひけそせきたる我の三河は社堂も深ふん
 美良公
 清水の特は清冷ありて味は甘く寒暑小増減ふしゆきくま
 湯成志のくに足まり清くそは清和流しゆきとら梅聖念が詩乃
 さく本道

美濃中山

後右

後拾

後拾

夫本

日

日

日

獲手巻

色うそ我美濃の中山杖をくはてをさうる逢坂の関
 けろくろみの中山屋の門も志のわをそを関の麓川
 都をはそねことろり又見そ関えある美濃の中山
 みの関不破の中山勇ましくぬふわんせんの辰川
 里はれ柴乃まこととを道もこうと不破の中山
 志まふ関登の杖乃下ろふまそく清くぬま井山
 やし清く松をん本流の駒をたて夕まをん不破乃中や
 ぬふ雪はくの中山うらもひ織や君と相なり公小
 定家
 本末成
 後人
 中勢親王
 中勢親王
 二条宰相

日

取小なる天法乃中山越過く備へ給ぬは関を長川

日

一字抄

不破頓宮

祇園寺を改めりぬとのやま格うういふ有雨の月

後柏木院

聖武天皇

行幸の時に小行宮を立ちし 天平十二年獲日本紀

垂井頓宮

垂井の倉乃小倉

後光厳院

文和三年南軍に勝つてひこ小行宮を建ゆし所也

民安殿寺

至徳三年八月日願主理業とあり

長川記

文和三年六月後光厳院乃帝志々々いふ所也
後光厳院を三々を中道の道小ありむき垂井ありり民安寺と云律院
あり其れ自ら極させり家松の老本とありくある瓜足と

太平記

世よ初月入る序新たるは民安と云やうえりてある松 華良公

義詮朝臣と兼く依く本秀綱を頼み備えい東坂平此幸く海安と云
こまて園の勢とも修さんと譲せられり吉野殿より大慈院の法印以
大將の爲小門へ召よせりや海法しける間坂本と云事ふされん幸
悪うまへて同六月十三日義詮朝臣龍鷹を守護しなると東進江
の方へ爲りし行幸の儀も二條の関白左大臣三條の大納言實徳西園
寺大納言實徳書過大納言忠秀松及大納言忠嗣大炊御門中納言家信
四家の中納言隆持菊亭中納言直亮山院中納言兼定左大辨俊孝右大
辨経方左中辨時光勳解由次官ゆれ知權弁二品親王ふりせりふま
出世坊官一人も沙け石具せられ龍鷹の法をよ所興をよめりる武士
ふは足利宰相中將義詮を大將とて細川相模守清氏尾張臣部少輔
倉房左京権右史同左近將監今川駿河守頼貞同兵部大輔祐時同左近
藏人土岐大膳右史頼康慈若備中守直禎依り赤山内左衛門信詮

これより成宗院のくくして都合其勢二子存騎和志堅固の漢道下駒成る先
て無慮らるる多敷口兵衛守自滿の子息掃部助貞祐ははに本年堅固
小澤とく居りけるが其辺の邊者どもとてひく二百餘人其野の浦小
如合て居り敵を討るんとんずつされぬ上を擁護しきて梶井二品
親王清門流の大衆集りて石具して居るを門主小公を主とて
弓とひ守矢をくわはれは同坂平の登園して居りけるは本込に守
秀綱二百餘騎もく遠の後陣も通るるはこゝの板敷村の侍所
ありては討止すとては兵五百餘人未雨より引色んぞ足腰乃射
手小澤ははを隔くせんく小射る同傍く本三良左衛門箕浦次郎
寺田八良左衛門今村五郎一所もみか討止ふなり秀綱と頼と切る一放
りあきたは踏止し討死しけると見え公長幸少や思ひ及ん高尾四郎
左衛門入道と二騎馬の鼻引引して敵の中へけり共よあまの敵馬の
を殺むさかぬくはる所あり討止ふたれを遠馬房延くる若堂元世七人
区一合せく討くゆと討止ふなり其衆と治は少く強要をうけ止先を供
奉のくはれ少く休先もくんやせ我らと治津海津の地下に軍勢くふ
一夜も退るせば幸あふとくはひかへしやをひなるるこれ道はかこの島
も取よくかひはあし討をけりる程よとりの御退るもよとて主とて
強要は先されとと早進しとて駕輿丁もみか進せとて一人もふれば
細川相模守清氏馬より死すとあざらふあり獲の上小主上成負進せ
て治津の山はぞ越られ多子推が股の肉を切道有が車此行論と助もは
忠もはとととと月卿雲客或を長汀の月小頼とあげ或を曲浦ま
浪本梅さうの七巴格一たひ叫と記と月使の色ふとむ胡馬忽小助く
路を美砂碓のくはれ先と古人の書一征路の篇も今とてはひとれ
これより路次の類ひもあがりくは英濃の垂舟の宿乃長者が
皇居ありて義詮朝臣以下の官軍みかにはこの至家小宿成りて
を守護しなる

仲山金山彦神社 延喜式内 大正一位勳一等 仲山金山彦神と稱す
神通百首

祭神 五座 金山彦命 見野命 周妻命 二座 祕神と云

仁明天皇承和三年十一月美濃國不破郡仲山金山彦

大神奉授從五位下 則預名神

承和十三年五月奉授美濃國不破郡中山金山彦神

正五位下

清和天皇貞觀元年乙卯春正月廿七日美濃國仲山金

山彦神授正三位 同貞觀六年五月廿二日金山彦神

授從二位 同貞觀十五年四月五日金山彦神授正二位

神武天皇元年鎮坐當國府中又崇神天皇五年十一月中

子日遷座中山麓又天武天皇壬申騷擾時行幸又朱雀

天皇天慶三年平將門叛逆時詔祈誓神功最掲被授勳

一等 後冷泉院康平年中安倍貞任宗任亂亦有靈驗

被授正一位

南宮攝社

十禪師社 二宮と稱す本社のわにあり

高山太神 三宮と稱す本社の南ふあり

牟人祠 二宮と稱す本社のわにあり

南大神 五宮と稱す本社のわにあり

七王子祠 七座 大山祇 中山祇 麓山祇 籠山祇

勅使殿 本社の小

護摩堂 長日天下安全祈禱と稱す

本地堂 無量壽佛 勝軍地藏 多門天 十一面觀音 不動明王 等を祀り

法華殿 元三大師堂 天喜年中

右瑞垣の内ふあり

龍飛將軍家御宮社頭小 三重塔あり 釋迦堂あり

藥師堂延暦十二年 葦原奉

落合社系神 赤蓋鳥尊 相殿五座 平將門調伏 附勅命小

多る 靈應あり 小の 水の 蔵合 所小 籠く ねと 柳に

胡千害祠豊王 稻荷祠系神 氏神祠系神 直日神二座

山王祠日吉七社 荒神祠伏 中殿寫 數之 祠系神 辨財天社祠中絶

金敷金糸社祠中絶 高山宮山上 隼人社日所 子泰社保食

神皇 五年 十一 月中 子日 童女 小話 して言 哉と

神明 官山 上小 あり神 宮と ねに

十八末社神 御子 安祠 のそ 子御 宮を 造り せし

十一面觀音堂山上 千手觀音堂子安 神田代社玉依 松下社八咫

夜裳堂神社天 大正十年 其及 中途 神明 治社

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

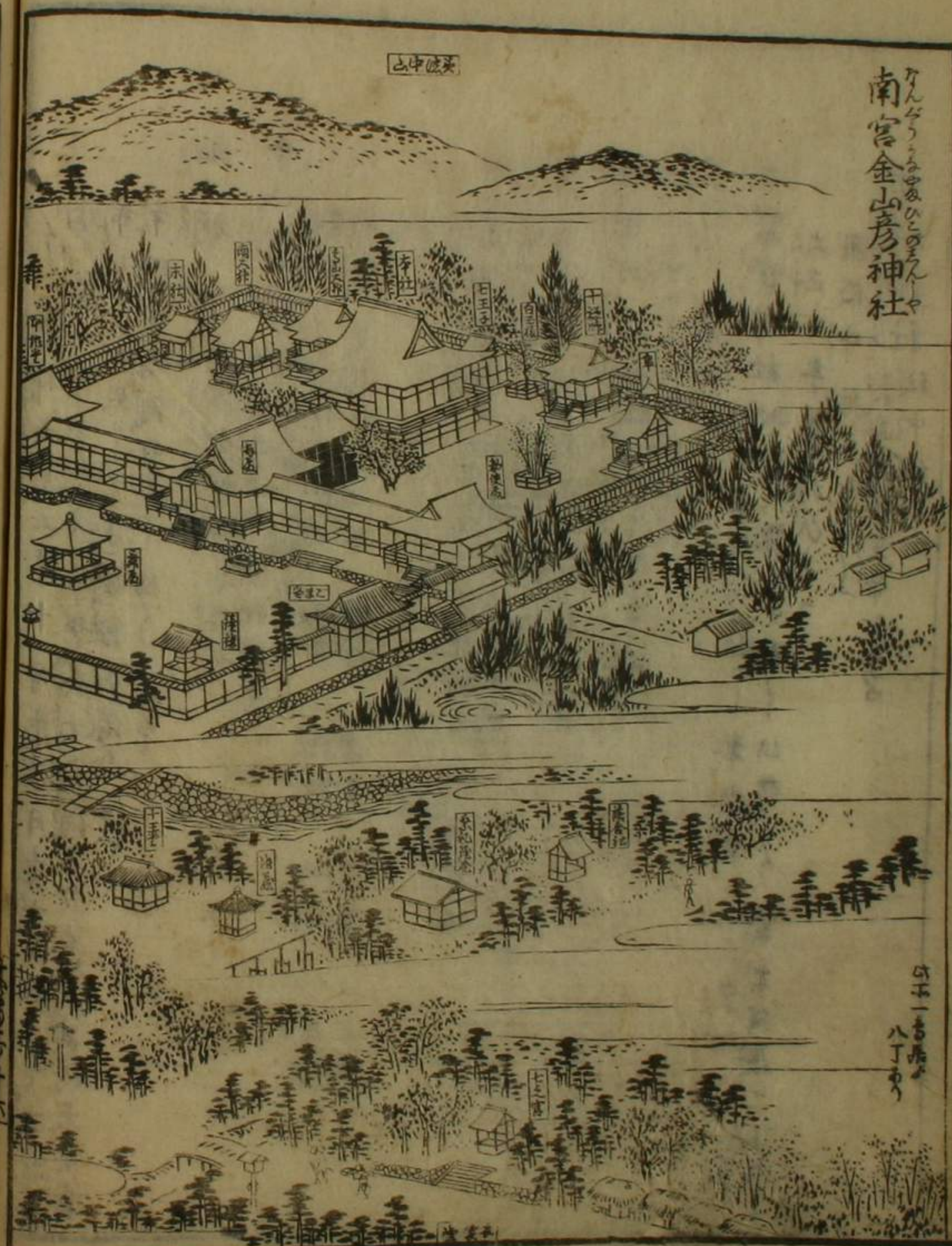
神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす

神明 治社 中途 皇帝 とす





天満宮

杜頭小あり

七之宮

大門通小あり
即吉山王と東内

十王堂

宮の入口

地藏堂

旧所也

大領神社

旧村の内小あり式内なり
系神伊弉册速玉男事解男

因府宮

旧郡府中村小あり
系神金山媛神垣山姫命豊玉姫

首社

旧郡荒尾村南宮より六十町あり
平将門の霊塚系不守守生祠

神本白玉椿

神本にあり

新井遺

吳波山の白玉椿より豊の明小あり
色久ぬき玉桂みの山小神や八子代乃きと云々

後二行社

鐘

鐘高サ八尺三寸三厘三厘
ひり金井駅の南東の中益池より出づ

利綱

狛犬 狛犬の作
 石鳥居 正一位中山彦太神と書け
 鐵塔 南無彌陀

如法經の書字一は
 中は仍心幸あり
 其後中絶



上耳 三尺二寸
 上 菩薩六辨
 下 四天王像あり

平氏能登入道沙弥淨普
 平氏左京亮氏仲

土岐美濃守源朝臣法名常保
 土岐刑部少輔源朝臣頼世

法名真兼

右兵衛太夫秀行
 藤原散位秀顯

新銘
 是應永年中
 再建修補大檀越
 右兵衛太夫秀行再興之時
 奉行ト云

源盛光 沙弥淨阿弥
 勸進聖 沙弥妙全

大工河内國高大路家久

應永五年 戊寅八月十日 白

空也上人和歌碑

此碑之社の末にこれを唱へては虚空より感動の聲ありて
 止らぬ小は守城人々を導き日下六字名号ありて
 二年外月日遊外才二世真教上人を以て
 五重石塔婆 塔の南にあり 銘曰一切衆生刹轉供養也
 文明已亥比丘妙先拜首

元朝 大宮橋社并上別
 奉塔堂并戸開并三朝之間修心會

日 大宮攝社淨節會神事

正月十七日 步射神事

二月八日 牛王供

三月三日 二宮三宮神樂前後の禊あり
内馬場後淨若後三夜の神事

五月五日 大宮二宮三宮神樂淨後新國府宮神幸

六月廿一日 淨田植

日 卅日 夏越祓

七月朔日 一七日 本地堂小於法華讀誦修行

日 七日 大宮并本地堂用麻寶物出掛

八月十五日 秋山神夏神前左右以芝飾山後明月獻神供

十月上旬日 淨鎮座祭祀

日 晦日 大宮開扉法華會

十二月廿七日 淨煤掃之神事

正五九月十五日 大般若經系詣千度神樂

日 十一日 本地堂護摩堂修法

日 十七日 宗源三壇修行

正四八十月 每十一日ヨリ十四日迄三座宛寺官勤行
十一日 系詣千度神樂修行

神事祭禮神供調進魚鳥獻之

其外月次神事畧之

神社考云

南宮山神者天武天皇白鳳之初所建祭也其華表題曰正一位勳一等金山彦大神金山彦者何神余答曰日本紀神代卷所謂伊弉册尊將生火神悶熱懊惱而吐即化為神號之金山彦是也此神於五行為金神於是乎其人又言曰初美濃國不破郡府中祭之後移于郡之南仲山故號



南宮
祭禮列式

南宮祭祀供魚鳥凡産于美濃者必以南宮為氏神云余復告曰天武天皇自吉野經伊勢入美濃塞不破關遂擊大友皇子盖於此時有所祈美濃中山而後建神祠耶其人答曰彼社家者亦云尔余復詰問之答曰朝敵平將門頸傳言飛入洛時神放矢射其頭今俗稱箭路御首宮者是其緣也

住吉明達天慶三年正月於美濃山南神宮寺修四天王法降將門二月十三日午時赤雲自東來入爐壇須臾臭氣盈場十四日將門伏誅

夫當社以南宮之稱其社之稱火南方を司る故小町辨る

陽神より文武兼備ふ故小國家崇まひ或は世の騷擾乃時帝あり事ありてびり所傳天武天皇の朝小は神功法皇國に施し給ふ慶長の礼を祀族安國寺に小陣に此を盛傳ひ乃其居大猷院公の所附今此れを速く再營ありたり珍歎る社頭例祭を三月三日神樂渡り又五月五日も府中村の所傳所より六月廿日所傳乃神更又十一月初申日の神祭あり神供物其用也又當社の神寶小大猷冠簾の圖あり其飛行藤の陰に下り當宮のあり今今所傳乃本社あり實水以來山下に遷座ある本社のあり約殿殿殿殿殿樓門左右督長石反橋橋橋神樂殿所供所神庫神樂舎社僧集會所社人十二人社僧十二坊其外生去の面々近隣小多し陰晴法嫌りん法一宇小國一宮と稱するなり

善川記

五日の申乃時より小橋井乃宿小名乃小名南宮の事と見ゆ

てとがら物さげくたらしむるよひなり風流のふきなどあるとや
昔のめくあはばは所小遊女などりへー又新ふあや色成ふたつん
幸於ふとくわらうごわなれを

養老院

萬葉

我宿のほろもろのむ草蒲茶こひる糸小行敷の衣
標井のむえよりむ武里并

兼良公

従古人之言來流老人之變若

大伴宿祢
東人作歌

云水曾名負滝之瀬

大伴宿祢
家持作歌

田跡河之瀧乎清美香從古宮

續日本紀

元正天皇平城宮養老元年九月行幸同

二年二月再行幸從五位下多治比真人

廣足遣美濃國造行宮

同九月天皇行幸美濃國有當替郡多一度

山美泉戊午賜從駕主典已上及美濃國

司上朝臣也

森川記

此姓

千百

わづえのくさうもはれぬのふ老とやまのまはるはる
名も老成はる感と空つたさく此泉のりえはくはる
吳儀園と名のよふま居やうのふはれて院のまはる

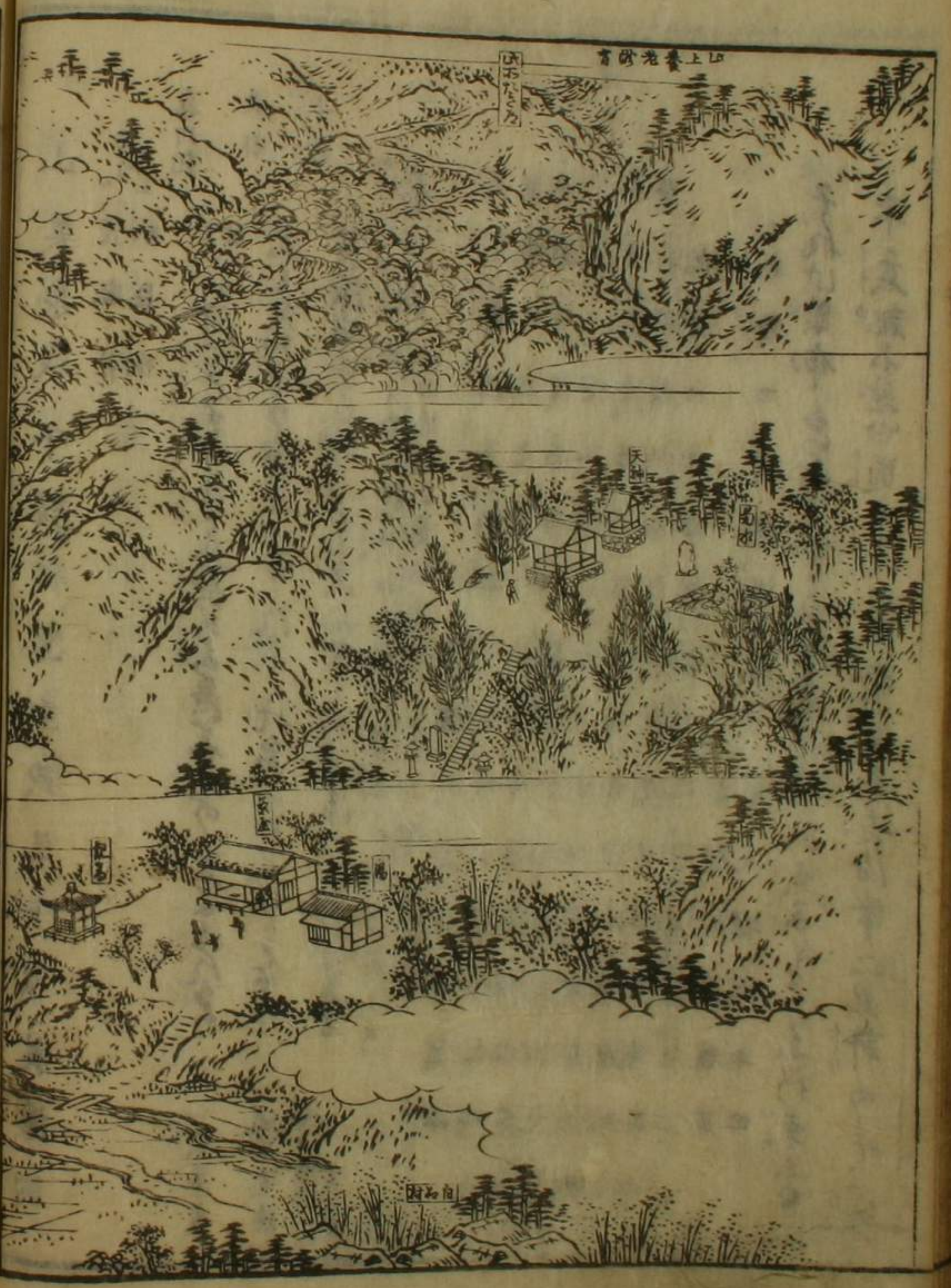
一泉兼良
風早実候
花の冠郡
玄覺

養老社

社の地はよむ水地あり

元正御極王道平問侍讀近藤篤識
當之極多度之平山天降嘉瑞地出物則天
清潔可食而不可窮人受其福王明之奇泉
一飲如浴不養而不可窮人受其福王明之奇泉
本如是萬古混死衰君是建取鑿戒可起
陵有本如是萬古混死衰君是建取鑿戒可起

乾隆五十年者宣日本超月立年也
それけ際布とつりへり名高く代の天子もらふ幸志の
幸意託不見也道る雲舟の南宮を去侍幸二里許めて一那





養老の龍

養老の龍
 養老の龍
 養老の龍
 養老の龍

會の地ありて終を鳥田とてその地ありて登る養老亭
 了所ありて山間小風流の樓を建て其傍小浴室ありて入湯の
 人養老水汲湯ありてこれ浴し老成ありて小の偶ありて終りて
 ありて時を奴婦如く筆派強と三弦を嗜しと養老伴に終りて
 養老の祠ありてその祠に祖清のひかりて溪河を越石を傳ひ陰成
 登る龍と見え其言遠道小ありてと浪浪とて山と多皮山
 との山麓の流をを回跡川と云又龍のやりに信ま石とて石
 物石面小垣衣茶の控形あり又根芽は石の名産と地境小勝れ
 て香強し真不危希文が龍の詩小自紅洞を下川と飲とつひ
 もと終りてあや比せん名ありて小の偶ありて終りて
 美濃御山 山の上小一ツねあり

新拾遺

作勢
 美濃院

續後撰

新後撰

日

後千載

後後拾

支本

日

現存

系集

勅撰奇枕

日

系集

本家十二系集

いづり英徳のれきりの岩松松獨りほまらた年とゆゑん

まゝのみのまゝ乃乃まふくもついでて人ふゆとてこれむ

むゝとてやうけうけなひかゝ英徳のれきのゆの乃古枝と

まゝのれき英徳のれきのほれれもまのれきまゝなほほれ

色々ぬみ徳のれきれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとての英のれきの本原とて夏もれれれれれれれれれれれ

まゝのれきれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

古のれきれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

なまのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

みのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

英徳ふれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

和家

遊義門院

系集

系集

後千載

後千載

系集

系集

系集

系集

系集

系集

系集

太平記十五
元和のれきのふあつて

金蓮寺

相模

春王丸

安王丸

相川

春王丸

金蓮寺

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

ねとてのれきのれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ



長範
物見松



青墓里

此節
教ふ
内
才陸連
君

本尊藥師佛 丈六の座像 基の彫刻 武蔵の調ふをて建
礎石 板に中台 慶一又信長公
の附 山麓 小堀一 再建 小堀一
青墓里 青墓の長の墓 塚あり
拾玉 一 疾足し人の情ふならふらふ 小堀ありあり 此里 墓

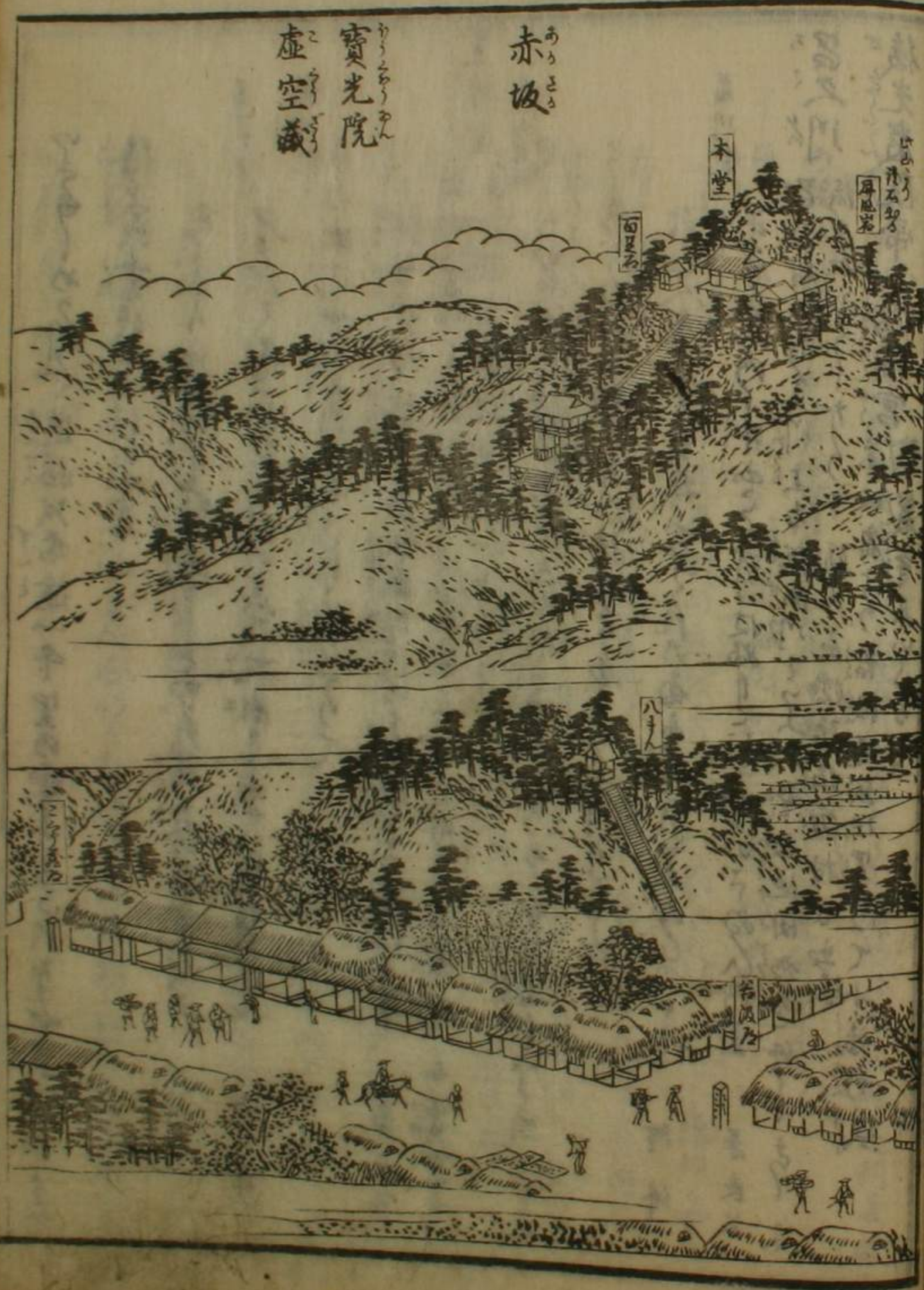
小篠竹塚 青墓にひき 照る 遺女あり 此墓あり 武蔵の調ふをて建
東海乃 麓あり 小堀あり 其 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
朝長墓 日所 山の方 山の麓 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
御勝山 青墓の墓あり 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
其 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建

甲塚 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
赤坂 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
赤坂 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建

子安祠 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
祭神 功皇 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
金生山寶光院 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
本尊 虚空藏菩薩 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
鎮守 御嶽権現 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
寢覺里 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建

抗傾川 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建

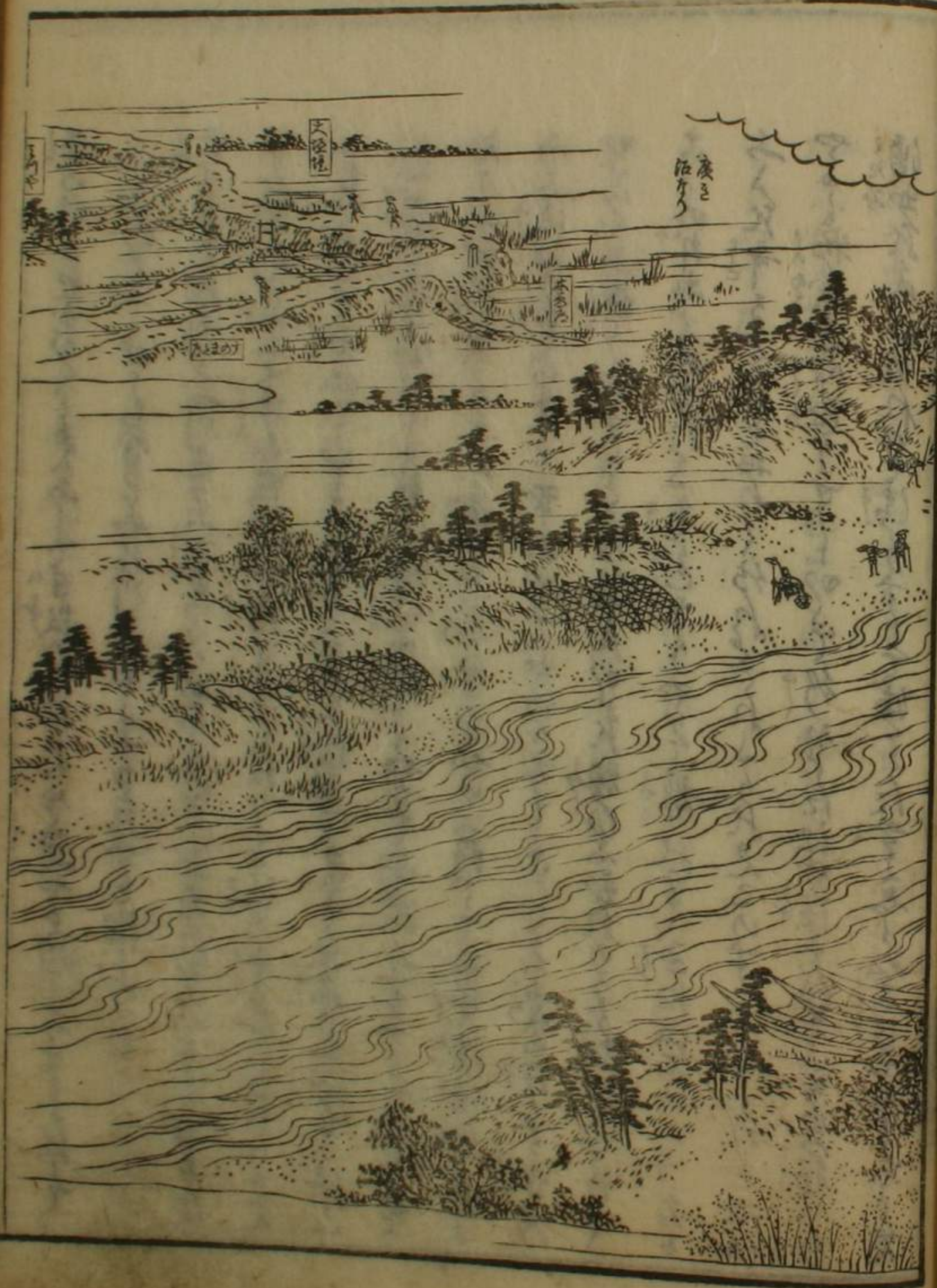
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建
武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建 武蔵の調ふをて建



志すれはるる神佛きたまを給つてむとせしめしむる事ありし
今来きまの御本之修まぬはは作らうひできまのめくこのかた
すらよほこよ著れしりふあうらうひさくさか乃おまひは坊ま
けいめいせしうはぞの表あけてありしぬまこの月を掛りりあて
りつしに海先うんぬる船あさう物さむくのさうすはく
この海うらほらりしやど小舟乃ぐりくさうさうさうさあやれ
心持しむてつけしきふさうさうさあやれはまのなまき
あさくさあさうてふふれしもの書之が時ぬもいさやれいひ
けらさあさうさうさあやれしことせしめし物ひの物さう
さあさの下の表あさくさあさうさあさうさあさうさあさう
心持しむて思ひはくさうさあさうさあさうさあさうさあさう
りよ不首これき舟れし耳るれしまさうさあさうさあさうさあさう
さあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう

又かかんてふ山はすくまうりてふさうりしむのりまはくさあさう
りはたむらひぬりてふさあさう

人をたぬ心このうらあさうさあさうさあさうさあさうさあさう
種のもくさうの所きたる木の枝さうりにはくあさあ本をさうはさうらん
さあさあさあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう
す人今言一表の著れれしむらさうさあさうさあさうさあさうさあさう
けあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう
けらなまをは何とさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう
所はけらなまの年の名さうさあさうさあさうさあさうさあさう
心あさ物ひさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう
今はこの老まはさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう
みさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさうさあさう



廣
河



呂
久
保
杭
瀬
川

道のりたすくもあつて日教のほりつるやと川へとて

大なるれはつと川へつとてあつてつとてつとてつとて

つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

お井るまゝやぞ又わけまゝあそちのた堂はあなるふこれ若
根ろわねはひるもつとてつとてつとてつとてつとて
すぐめでたさあ

今よりやうりもあつてあつてあつてあつてあつてあつて
不破の關をむつたあ神をたんとつとてつとてつとてつとて
戸をうりねつとてつとてつとてつとてつとてつとて

ひつとたあれつとて不破の案をむつとてつとてつとてつとて
冥の若川と其名もあつとてつとてつとてつとてつとて
つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて
だめつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

はてまのつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて
あつたわつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて
今を何とつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて

る所本師にてむしこれ初るねうしはあつりれまうううう
よくまき尋ひてうううしを後てをううう

うううけれんのは心の師ううううううううううううう

わして二三日の道を六日の程ふううううううううううう
下の氣をたもふとてびんううううううううううううう
げふうううううううううううううううううううううう
たふ城ううううううううううううううううううううう
聲も心の程ううううううううううううううううううう
おひううううううううううううううううううううう
あやううううううううううううううううううううう
まじおらほううううううううううううううううううう
すのううううううううううううううううううううう
此ううううううううううううううううううううう

社ううううううううううううううううううううう
見ゆし内裏のううううううううううううううううう
かううううううううううううううううううううう
まううううううううううううううううううううう
るううううううううううううううううううううう
てううううううううううううううううううううう
まううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう
中うううううううう

時光の程はれうううううううううううううううう
因すうううううううううううううううううううう
奏うううううううううううううううううううう

侍とじ作幸ありし小

志さるるらぬ山のけをそふ麻坂もへん整りありし

神代をうけたるゆゑにともさうり却るるまのせおとくやそれらる
初書に侍とじひりくはるる幸あり藤倉大納言の月乃侍を死
さみ侍し月乃雨乃中懸を侍りて

忘天象

おりのけを侍し山の守座小のふちや月を形くは整りあり

旅曙

横雲のさるるらぬ麻坂のゆきややうさうの侍とじゆ

は所はもとめて侍らうゆつたるよりくや侍しやえん整りあり
しめとみるはれぬ又高倉のてぶらとた中りく足さくくみれ侍ら
御湖のすの再よて門を侍らうりくは侍らふかおれ侍らうて

名産甜瓜

美加のやま里

小真桑村あり

は西の巻至く

美味の上貢小

侍ら

瓜の皮

水も侍ら

ふんれ

其角



けらたふたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて
けらたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて
けらたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて

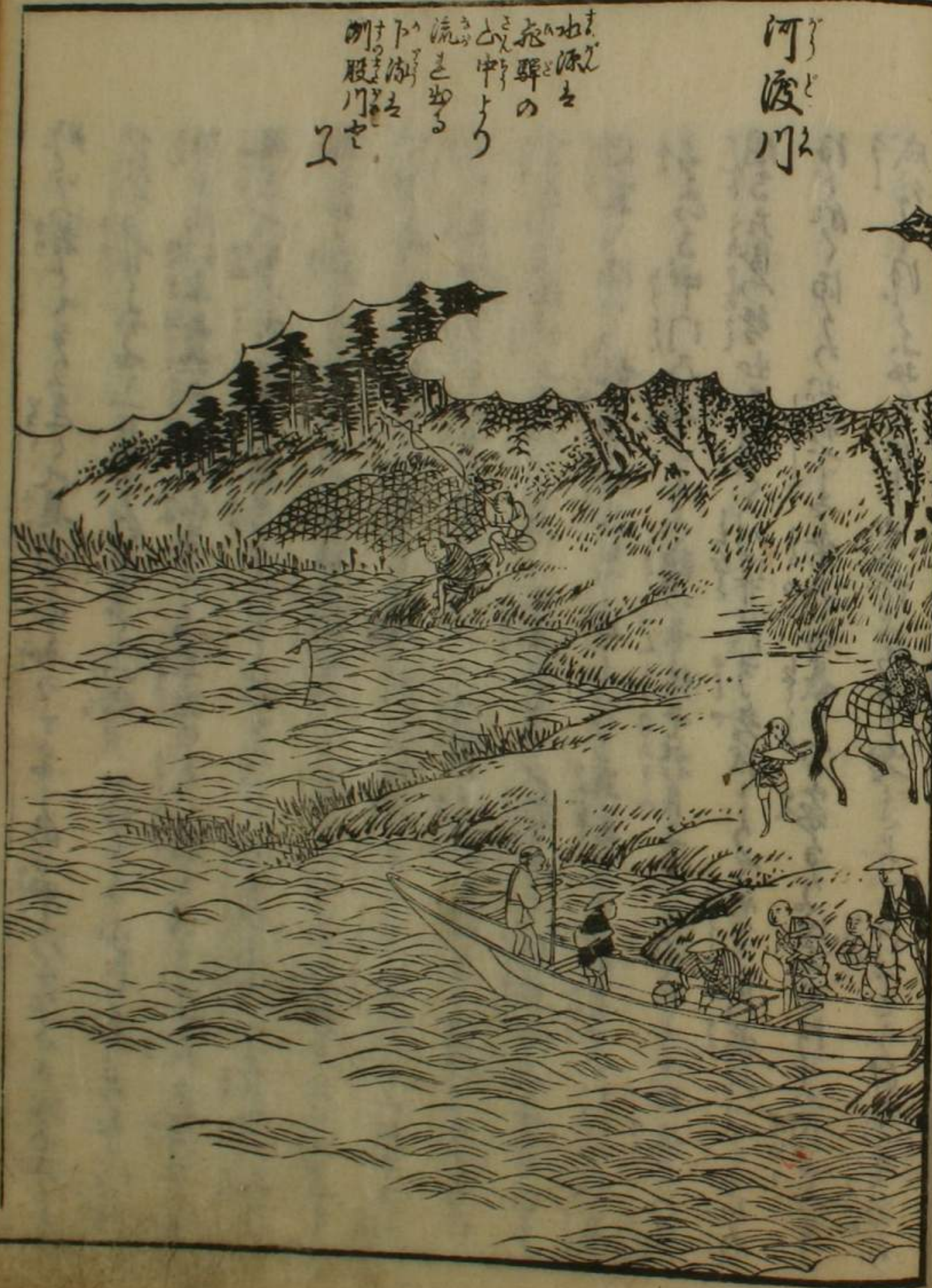
甲のまやまひもやうぬりねむらばの月ば海と海と

可れつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて
けらたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて
けらたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて

かれの民もいふか見申すせんさうけりていふれをいふ
けりていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて
けらたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて
けらたれまやたはきりせりてうへにたれ我身ひつる中
れきりていつていふはたがていふに上老の遊をうし前入りての
候ふれぬまは中ひも申しては侍りてくまのりたてまはあて

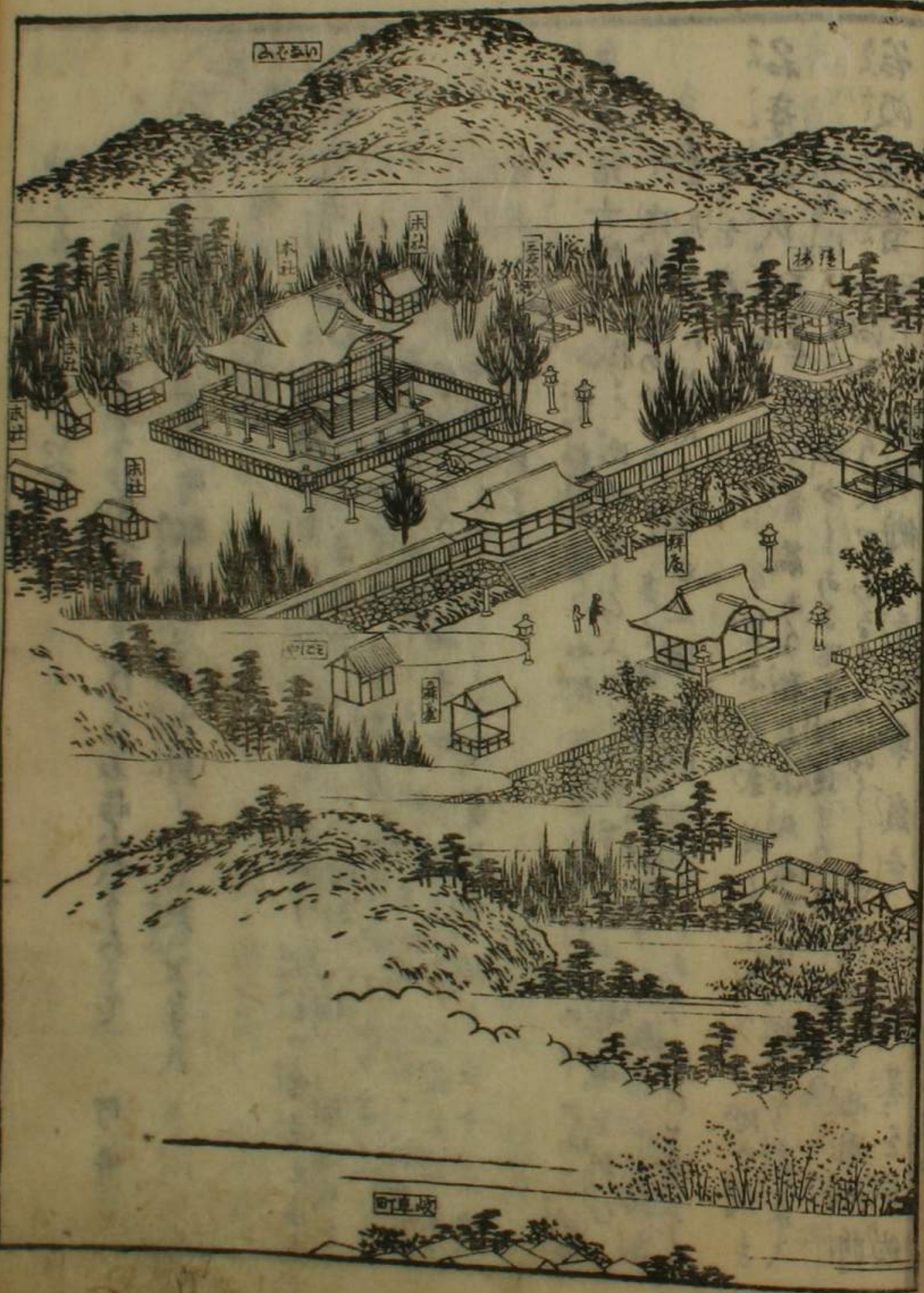
河渡川

水は源の
飛騨の
中より
流るる
下流
明の
股川
工



あつて... 甲乃... 後陣... 將軍... 馬... 十疋... 佐竹... 内裏... 上... 周... 成...
あつて... 甲乃... 後陣... 將軍... 馬... 十疋... 佐竹... 内裏... 上... 周... 成...
あつて... 甲乃... 後陣... 將軍... 馬... 十疋... 佐竹... 内裏... 上... 周... 成...

け... 遊興... 仁義... 都... 煙... 名馬... あり... 今...
け... 遊興... 仁義... 都... 煙... 名馬... あり... 今...
け... 遊興... 仁義... 都... 煙... 名馬... あり... 今...



神とそまゆらふは

浦の地をうらむ山の手をうらむはねが成すまて 阿伴

美江寺

河波寺で一里六町 野中左右お射して巻となり

美江廢寺旧地 宿願地 社の地 旧跡あり 聖観音 新観音 高僧 奉中

土佐頼朝 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中 聖観音 益寺 奉中

自然居士墳 聖観音 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

名産 祖瓜 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

谷及観音 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

糸貫川 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

金葉 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

修後拾 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

第千載 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

席田 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

日 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

新勘採 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

新勘採 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

船本山 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

船本山 奉中 寺あり 秘藏 奉中 聖観音 益寺 奉中

後拾遺
新編撰

河渡

河渡川

此所より破年へ三十町あり
加納まで一里半宿の東端は小川あり長柄川の下流
乙津寺
大所堂
立石院
河渡川をいづりて後村と經く後此乙津寺にあり
幸庄の中ならむ村あり梅の名物の所と笑味して是より
筋遠小川津周小く破年見ゆか

稲葉山

稲葉山

稲葉山は破年の小あり城の遺跡あり
信長の城あり織田信忠の子中納言秀信は城に居たり
右の山あり古徳安寺あり
今はそ稲葉山の山の時より今ひとそりし
稲葉山寺と別よりこれ歸入るべきなり

定家
日
お氏
唯平
中納言
信長院
後拾遺
新編撰



長柄川
鶺鴒船



鶺鴒を
火も
漆
舟の
長柄川

夕雲の
舟
長柄
川
八幡
美濟

建保百首

建保百首

建保百首

因幡神社

紅葉せし林の掃葉のち風小松のこ強さをありはる
 物とせし風のほてふふはるこく掃葉の山小はるる白雲
 いまは山松の嵐や寒うく人婦りせれ里は夜うけるわ
 今ちとてまて掃葉の孝の松林よあつれて言を傳
 蕨麻する花乃下風立りれいさるれ山の松せうひるれ
 立歸り今はいふれ山風よ山川の言するそ山房の丁点
 人まて林を掃葉の山風小言よあつれて言を傳
 志うくともあつてそあつて不破の因幡葉の山乃いふはひや
 孝乃松すとの花もうちひきのおもろ山はそく林の風
 しかは山松の松風浮暮てむく雲白くゆる秋乃月
 林の因乃たひじ言をいふそく山松葉の孝れ松風
 歸んやのひ葉松葉の山乃いふ山峯にまのそく

休衣長
 兼平陸浦
 後寺時院
 芝崎入道
 後寺時院
 蘇政
 石家
 通具
 國華
 慈彦
 社以
 仍竟
 整度
 長

祭神 五十瓊磯入彦命

聖仁天皇の皇子

鳥居額正一位因幡社

文徳四年丁卯信濃二日
從三位藤原朝臣延頼書

尚社は、先を伊奈岐山椿原に遷座し、延文八年此處

毎歳秀就滅を築く時今の地不遷座ある又土人の言小云は中

上右の因幡國ありより神跡あり山松金死山といふ陸奥

の金山中いふところの神名帳及び三代室深由志見えたる物於

氏の祖よりと我々幸社の傍小神本三本松向うめぐり末社中

門回廊石階御殿を居明禱庫玉垣繪馬殿下段の地小流あり社額

壯麗ありて縁井汲車一汲舎の生亡神と我々志すれは

川は年の小川河津色因幡山乃藤原源氏系孫孫國より出く

鴨畑社を長柄村より尾列彦の命令成受て書くより河上

漕の舟り園の衣おねを照しおのめらふさく物鴨畑の綱

とけをた務成はふまは又先づ一人して務を十二三羽ま

長柄

五河記
けうひ継成とてん幸いと奥あり

十七日... 船をゆきけそふのわて見物に... 川のはらり... 船をゆきけそふのわて見物に...

鶴の鳥... 鶴の鳥... 鶴の鳥... 鶴の鳥...

鶴の鳥... 鶴の鳥... 鶴の鳥... 鶴の鳥...

つらふと思おもはれぬ... 船はあつた...

鶴の鳥... 鶴の鳥...

あつた... 船はあつた...

日

長柄水楯

けあつた... 船はあつた...

收年山

味前... 船はあつた...

日

岩田小野... 船はあつた...

十載

郵後採

後後拾

今... 船はあつた...

鶴沼... 船はあつた...

加納

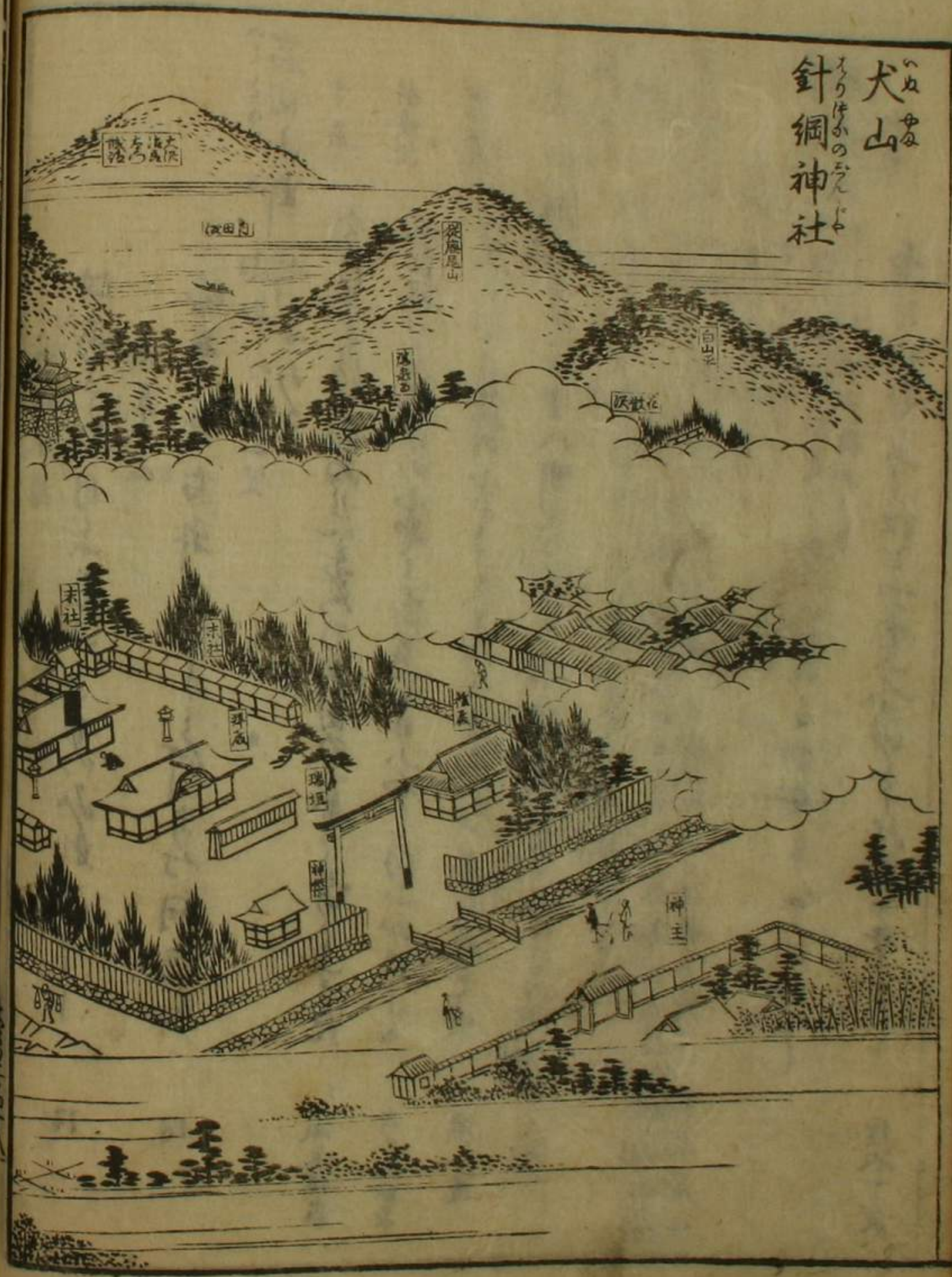
天神社

の... 船はあつた...

結末

あつた... 船はあつた...

日





針綱の別業

八月廿八日

針十二年 聖として 兵服商人
 死を戴き 巴の十七人 大母衣
 笠負の山伏 又人傘 許
 十二神 神玉の洋指
 御醫 御弓 神帶者
 それより 神典
 神幸ある
 社勢の 騎馬車
 佐手は 十二年の
 許と 守子の
 御くまの 御
 辺隣の 在郷
 みかひ 車式を
 執むる 表を
 する 例式に

郷社

あはれ足したる通縁の松ひらけくはくは名成るゆへ

武志山

瑞龍寺

加納の山の中あり瑞龍寺山とて妙公寺悟寂和尚の

苗部神社

加納の苗部村あり

比奈守神社

加納の比奈守村あり

新加納

加納の五里あり

飛鳥田神社

飛鳥田村あり

加佐美神社

加納の加佐美村あり

御井神社

加納の御井村あり

若勢野

加納の若勢野村あり

針綱神社

加納の針綱村あり

村國神社

加納の村國村あり

鴉沼

加納の鴉沼村あり

惟子山

加納の惟子山あり

勝山窟観音

加納の勝山窟あり

波蕨川

加納の波蕨川あり

それは波蕨川のかげ早く川邊の岩多くはくちりて奇く妙く



岩窟 いわくわ
 観音 くわんおん
 後の房子清水 のちのぼうししみず
 洞 ほら



親吉坂 おんきちざか
 大岩 おおいわ
 下の田川 したのたがわ
 松のゆた まつのゆた
 英波 えいば
 舟 ふね
 風来 ふうらい
 舟 ふね

千雷をくわくわく其風系ありて河瀬とさる船をぬく駿浪奔馳して

伏見まで二里は宿お對して巷張るれ幸ふ商許

美濃 大田

は所より飛騨國へ越る道あり

名造 國鍛治 志田より二里許ありむより一都會の地ありて町あり

名産 檜材 志田より一里少くは檜材を製してはり村あり

名産 矢儀紙 志田の乾の方武藝郡より多く出れば那の庄いり

太田 川の東にあり一里上り河合より本号川の下流まで

縣主神社 志田の北にあり延喜式内

鬼首塚

は色の 鬼首の 塚あり 二ノノ 見よ



金山古城

右田の東にあり信長公の居城三方橋の
日武義守の居城あり

伏見

御岳中をき里の間にあり西に多く平池あり性還の左
右に列樹の松あり東海道の名し是より東あり列樹の松あり
山里にあり

在原行平塚

河の向ひ小由縁

鬼首墳

合後中村の間にありむく國を帝とす
盜賊ありそれ刑にたる首塚あり

御嶽

細久手まで三里宿中五所許お對して巷坂を其餘散生
して山回小居に

大寺山願興寺

御嶽の宿乃西あり
天台宗

本尊蟹薬師

傳教大師
の化

阿弥陀堂

本堂の西
あり

庚申堂

右の隣小
あり

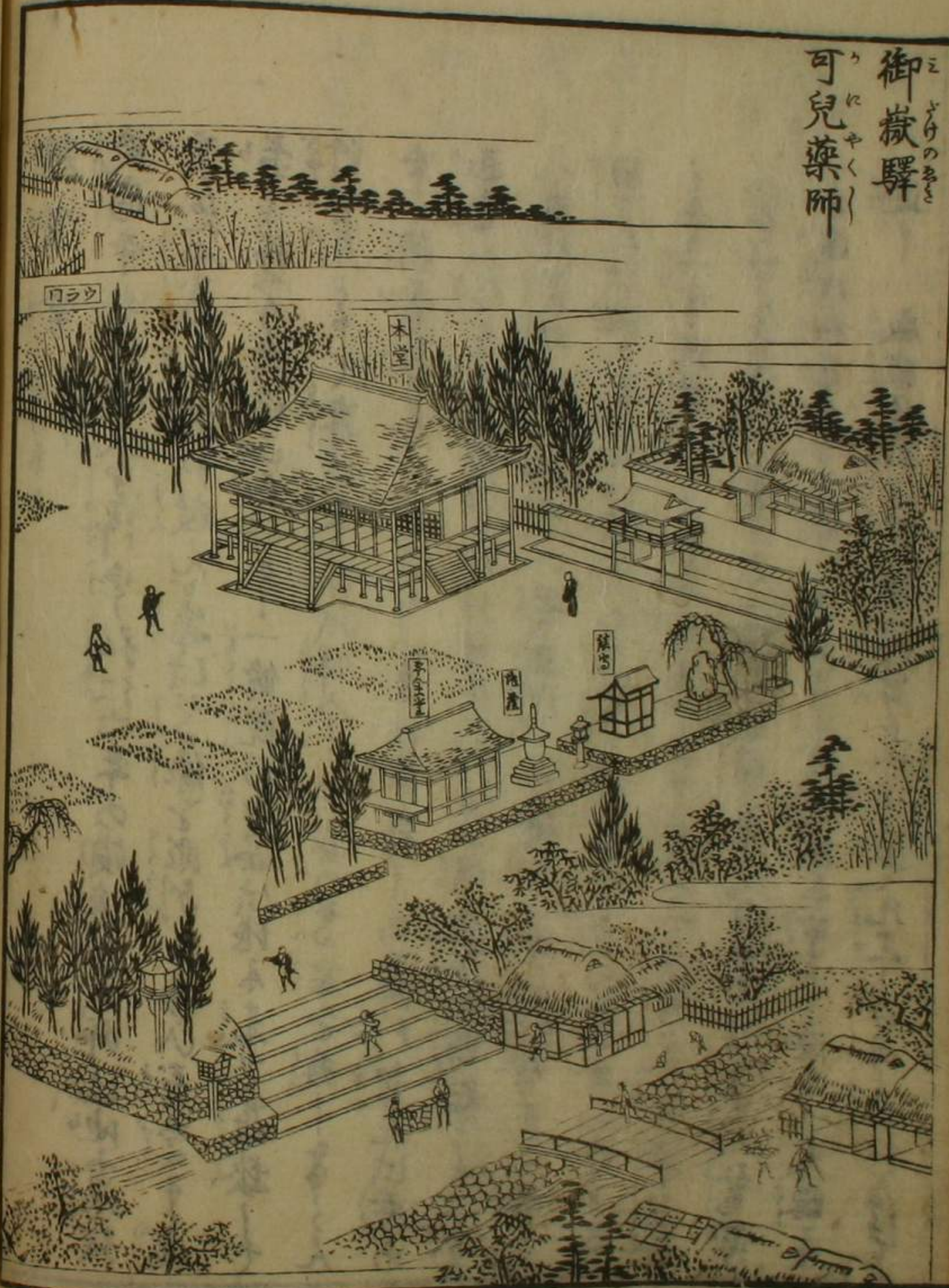
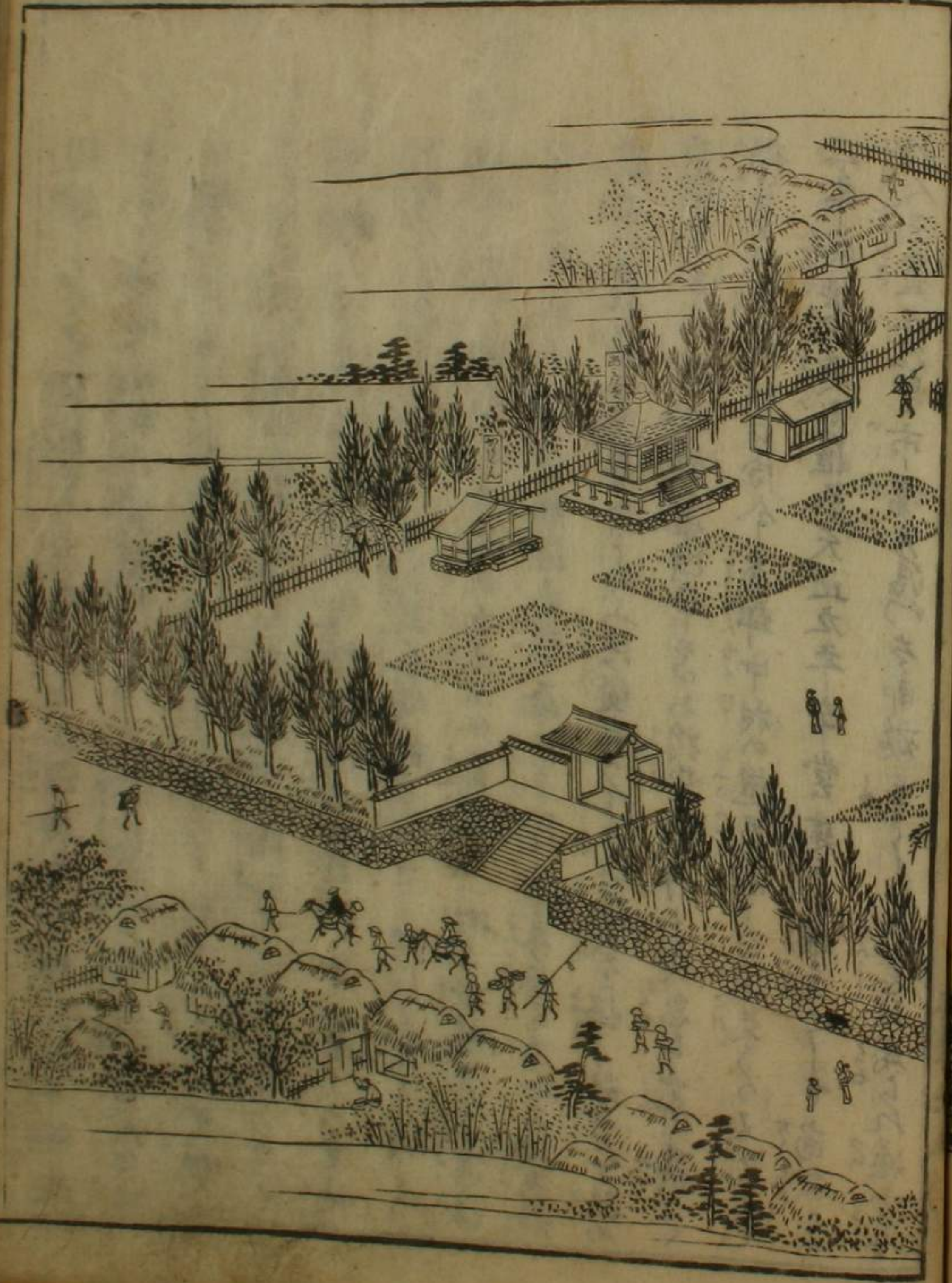
閻魔堂

本堂の東
にあり

護摩堂

奥の方小
あり

夫尚寺と信滅天皇清寧弘仁六年の頃傳教大師は地も湯は
て免人氏の痛苦救んが爲ける像と彫刻し移り榮堂に安
置し移り其後正曆四年一條院乃皇女は地も湯と難故して
行智尼とて專は尊像は歸入し生身の容をねしをく人
幸と朝香急りふく祈りてあり是地幸形あり行智尼は寺の
西南ふ卦に大池のほとりは経のひたす小池も風多晦暝して一寸
八歩は薬師如来救千の蟹圍繞して涌出あり行智尼小若く
日れば地も湯縁の衆生あるが故小化益を垂ん幸思ふ故よ海
し一宇は造立しこれを安んせよ也宣ふ今は祈を尼く他と号
山を呼んく醫王峯也一時は長徳二年二月七日あり里人驚異
一遠近稻麻のやく集る幸れより武國府小申し遠小 天聽小
達し 殿威の餘り佛圖造営も下りて九三とせの善杖にて



御嶽驛
可兒薬師

諸堂として成就せり周後大寺山願興寺を辨入佛供
書あり導師比叡山覺運信ふりて出現の靈像を行智尼お仏
城腹を不獲移り今本如く八百餘素と行るといふもけ日費賊群と
るなり又厥后長保元年正月七日大般若經開出せりけ所と名づけり
經ヶ倒とゆふ其頃高國賀原那賀原村お於て三千六百人の寺地
と賜らるこれより毎歲正月大般若轉讀を修せり内日元年二月より
棟本を礼を好む天仁元年の兵火お伽藍借坊一時お炬燵とす其後
正治元年時の領主續續源吾盛康力とありて再興本乃其頃高那
寂本の巖窟を園を即とてお強盜ありて大お人民を悩め賊窟と採め
て内幸より御主盛康は幸そのお新築成けりお忽ら窟を移り
攝とらん首級刻ら内今高郡中村の鬼首塚とて是より又元龜
三年兵變の災お罹ふ天正九年幸堂建之願主とて高郡を
任人王置と治郎市場を居りて即施主とて源志成用られ遂お再

源宮

まに即今の伽藍これより幸堂を指回し指回同幸そのお長口尺守靈
佛用庭の特業障除き幸親とてお中を以てお下も膝膝とて拜
せらるるの多し又寺より出る所の乳茶お乳のるに婦人お靈驗あり
其外土伎舞夜武田森等れ家よりおお捨多し又可思の替女可思の
才後か由縁奉ておつふ跡ありけ靈言と東山道首とるお付て人
馬を止免所靈を以て指合に入らぬなりと云

日本紀

万葉

景行天皇四年美濃泳宮行幸

百岐年三野國之高北之八十一

鱗乃宮尔日向尔行靡闕矣

いづれはしるるのまのゆふむむひるまゆふあむむん?

頼りてくられ池ふむむくくひを道のちまふれ

夫本
旧

光類

和泉式部墓

和泉式部墓 十町許のひがしにあり本所の

鬼窟

鬼窟 奥ふたに幸ふは

一香清水

一香清水 碑ありとも昔はくしてあり

永保寺

永保寺 村あり虎澤山と号し新開天竺の

平巖

平巖 平岩村の左の方ふ平石

細之手

細之手 大湫まで一里二十町山家之坂より系より下りては石を登り

月吉日吉里

月吉日吉里 細久子の南土波郡の内月吉里日吉里両村あり

山家

山家 畠のつらひとそに有るの月吉日吉里なるて

琵琶嶺

琵琶嶺 細久子よりき里嶺より通至りて嶺に

母夜岩

母夜岩 下にある

烏帽子岩

烏帽子岩 右の嶺ありといはれ

大湫

大湫 大井まで三里半細久子大湫

竈山

竈山 大久子の南

西行法師

西行法師 大井の宿守里の中村

大井

大井 中津川まで式里半は宿山中にてお對の家三田町

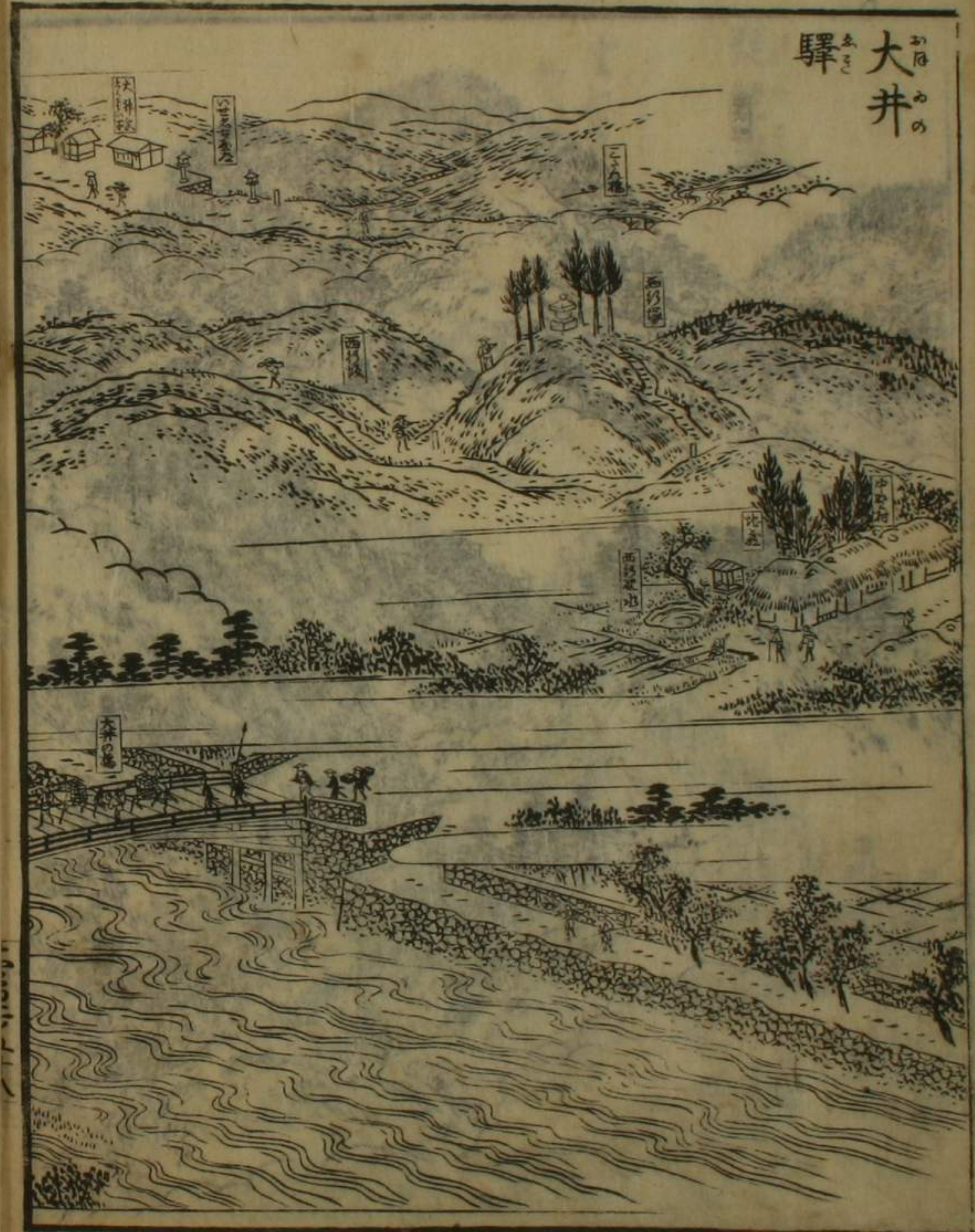
并待る山

并待る山 同小敷在に

月吉日吉里の里あり 三列 本采

大井の國之南の山は日吉をさすたはぬ故とす 陸人等





衆の心く風の香ふ風さく大井のよせに教養をきく あり

ちたれつ入お乃種の高はるあすもやどはまんとすん 日

は二首の奇と西引と記して大井の宿内

花あ 山 大井の宿の南東北村の中宿あり西行伝件

遺れ又其附の井也

山家 思へて花のあうん本の中はゆかけやち我をきかん 西行

乳題 花あれ事なきみけさ昔此あれゆて去とあすは 後金と成

大井橋 大井の秋西の方入やあり中間小橋板あり

根津甚平墓 大井の東石橋村あり甲辰武田信玄の家伝あり

坂中 大井の宿中津川の宿の間にありひは所宿取あり

八幡宮 千社橋あり性記よりを河津入

落合中 落合中 落合の宿あり延喜式内 げり峰と山間本教生に石よ苗本城足ゆれ

本若二五十九

中津川 中津川の宿あり延喜式内

惠奈神社 中津川宿の巽あり延喜式内

与坂番所 与坂番あり尾州公より

落合五郎兼行靈社 落合の宿あり本吾義仲の

麻物語の里より落合の宿まで凡三十餘里英傳の境あり

既記嶺より山路あり其傍路を垂舟歌栗田光典の考成あり

交々ろろ小記を介をむくく惠奈郡小古道ありて是徳王

小苗原伏在るど入まへ幸三代帝録に見くくわ天曆天徳の

頃より奇あり信濃を流る落合より都く唯月嶺まで四十

七里大畧山中にへ坂まなむはくき所ありみる山原あり

ゆへ人の心重月ありて都をうくは後金のそくふく依方あり

くくまの浦見やうし又山川乃くくは林本のあざら後列あり

まがれくうはくくをり人をく時くくて道のゆきくせり

かた心志何より三冬初春のころ雪深くしてゆきく程
形を核道有ては領主より絶た修程一好は老うの
か依りたりたて下に見て

本曾路名詞圖會卷之二

本卷三六十一

八 常入倫名義

室旭東先生著 句々付

全一冊

此書ハ又常入倫の存と委く述及ハ大学の録款と附録とを以てし
の徳と明く小なる上と天下平かく小を二十餘首ありて儒教の旨
樂末に病中の懸とあれは
沖仁政の尊き事と江と是旭東先生の博學に
りて一故小國字との教語との初学の徒とて展々之を淵
先んといふ人の小學の意よりこれより固く童蒙婦女たり大なる
耳に熟する時ハおのれに聖教の徳よりこれと補はんを正し
忠信やこれと云るに作伝なるの書あり

浪華書肆

心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

宋子卷

作序了看

新
志